

リベラル・コミュニタリアン論争の倒錯

～「自己」をめぐる議論から～

Distortion of Liberal-Communitarian Debate

—Argument over “Self”—

齋藤 和輝

Kazuki SAITO

(和歌山大学教育学研究科)

小関 彩子

Ayako OZEKI

(和歌山大学教育学部)

2019年10月11日受理

Abstract

A robust argument between advocates of liberalism and communitarianism took place between the late 1980s and the 1990s. Much of the debate was conducted between John Rawls, on the liberal side, and Michael Sandel, who supported communitarianism. Rawls stresses “freedom” while Sandel values “community.” This difference is the subject of controversy. Analyzing this controversy reveals that Rawls’s claims include those of Sandel, and Sandel’s claims include those of Rawls. The purpose of this paper is to clarify the apparent distortion in their views.

はじめに

1980年代後半から1990年代にかけて、「リベラル・コミュニタリアン論争」が激しく燃え上がった。リベラル派を先導するJohn Bordley Rawlsとコミュニタリアニズムを先導するMichael Sandelの対立も、上記の論争の一部を担っている。

しばしば「自由主義」と訳されるリベラリズムを「共同体主義」と訳されるコミュニタリアニズムが批判することによって、この論争の口火は切られた。しかし、この論争を整理していくと、リベラリズムの方にコミュニタリアニズム的要素が内在しており、またコミュニタリアニズムにもリベラリズムの主張ともいえるものが内在している。一種の倒錯が生じているのである。

本稿は、リベラリズムとコミュニタリアニズムにおけるこの「倒錯」を解き明かし、ロールズとサンデルがどういった論点を軸に、議論しているのかを明らかにしていきたい。

I 論争の一般的理解

リベラル・コミュニタリアン論争における「倒錯」を解き明かす上で、従来の同論争における争点を提示しておかなければならない。Iでは、リベラル・コミュニタリアン論争についての一般的になされている理解をまとめる。

I-1 サンデルのロールズ解釈

この論争は、サンデルによるロールズ批判によって引き起こされた。この節では、サンデルがロールズの主張をどのように解釈しているかを整理する。

サンデルのロールズ批判のポイントは大きく2つに分類される。

1：ロールズの「負荷なき自己」論への批判

2：ロールズの「正の善による優先」論への批判

今回、取り上げたいのは1つ目の「負荷なき自己」論への批判であり、2つ目は紙幅の関係もあり、今後の課題としたい。

1つ目の「負荷なき自己」論というのは、ロールズが想定した自己論のことをいう。ロールズは『正義論』の中で、「正義の原理」を定義するのであるが、そのために奇妙な手法を使う。始めに、各人にまつわる情報が明らかになっていない状態(原初状態)を想定する。その状態の人間が選択する原理こそ「正義の原理」である、とロールズは主張した。

サンデル(1982)は、ロールズの自己論を以下のようにまとめた。

原初状態における自己は、社会での地位や、人種・性別・階級・富・運・知能・体力、その他の自然資産・能力についての知識を奪われていると仮定されている。さらに、彼らは、自分の善の構想や、人生における価値や意向についても知らない。それらを一時的に忘れて、正義の原理を選択しなければならない。このような制約によって自然的・社会的環境の偶発性によって引き起こされる偏見が回避され、正義の原理を選択できる。これらの合理的な自己は、共通の利益に基づいて行動するために、公正としての正義を選択する。[cf. sandel 1982: 24]

サンデルによるとロールズは、正義の原理を選択する上で、当事者のあらゆる情報は伏せられ、本人はその情報を知ることはできない、という自己を想定していると解釈している。サンデルの解釈は以下に続く。そのように情報を伏せるのは、当事者が偶発的に手に入れている地位や身分や能力に有利な「正義の原理」を選択できなくするためである。例えば、富裕層に生まれてきた人間は、経済的に豊かな人間に有利な制度を好み、経済的弱者を救う制度は肯定しない可能性が高い。だからこそ「正義の原理」を選択する原初状態における「自己」は、ありとあらゆる条件をはぎ取られている。そうして、すべての人間の初期状態における自己を統一的に設定する。さらにロールズはこの自己像に、もう一つの特徴を付与する。それはこの自己が合理的であるということである。こうして、自己の情報を知らない合理的な人間が完成する。そういった人間は、合理的であるために、全員が同じ選択をするという。そうして選択されたのが、「公正としての正義」¹⁾、である。以上ここまでがサンデルによるロールズの解釈である。

サンデルのこうしたロールズ解釈は正しいのであろうか。

原初状態の人は何も知らない。地位、階級、身分、資産、才能、運、知力、体力、嗜好、性格、社会状況、文明、文化、世代など何も知らない。この初期状態から正義の原理が導き出される。〔cf. Rawls 1971: 136-142〕

ロールズ(1971)は、原初状態における人を想定する。原初状態では、無知のヴェールをかけられ、自分に関するあらゆる情報を隠される。そのような人物は、正義の原理、ここでは「公正としての正義」を選択するという。ここまで見れば、サンデルのロールズ解釈は妥当なものであるといえる。

1-2 サンデルのロールズ批判

サンデルはロールズの自己論を正確に解釈した上で、批判を展開する。以下はサンデルの主張である。

自分自身を独立したものとして考えることは、自らの家族・コミュニティ・国家・国民の成員として、自らの歴史の担い手として、過去の革命の子孫として、現在の共和国の市民として、自分自身を理解することから分離できないという事実から独立していることである。多かれ少なかれ、持続する愛着や関わり合いが一つになって、私の自己を部分的に定義しているからである。〔cf. Sandel 1982: 179〕

「自分自身を独立したものとして考えること」とは、

ロールズにおける原初状態における自己を想定している。そして自己は、自らの家族や国やコミュニティから分離できないと主張している。サンデルは、同著で自分自身を「独立したものとして考える」自己のことを「負荷なき自己」と命名し、批判する。サンデルは、現実における自己というのは、自らの家族や国家やあらゆるコミュニティと関わり合っており、そのつながりから自分自身が定義されていると強調する。ロールズの「負荷なき自己」という自己概念は妥当ではなく、「負荷ありし自己」こそが正しい自己概念の理解であると主張する。

しかし、サンデルのロールズ解釈への批判点として次のようなことが考えられる。ロールズは、原初状態における人をあくまで「シミュレーション」と位置づけ、日常生活での想定は不可能と主張している。自らの情報を何も知らない人間が存在していないことはロールズにとっては百も承知である。正義の原理を導き出すツールとして、ロールズの自己概念は想定されているのである。つまり、サンデルの「実際に独立した自己など存在せず、環境や共同体に制約されているのである」という批判は的外れである、というサンデル批判が考えられるだろう。

ところが、上記のサンデル批判は的を射ているとは言いがたい。ロールズは、「公正としての正義」こそが採択されるべき「正義の原理」としている。では数多考えられる「正義の原理」から「公正としての正義」が採択されるのはなぜか。それは、ロールズの原初状態における合理的な自己がそれを採択しているからである。それを導き出した人物像は、「実際に存在しないシミュレーションでしかない」とすれば、導き出された「正義の原理」の妥当性が揺らいでくる。「正義の原理」つまり「公正としての正義」の原理が妥当性を帯びていて、その原理を選択することが、原初状態における合理的な自己を想定していることに依拠するならば、全ての人間が「原初状態における無知のヴェールをかけられた場合に公正としての正義を選択する人間」でなくてはならない。原理だけ抽出しておいて、選択した人は「架空である」とするのは虫がよすぎる。原初状態における人間が架空の想定された人物であっても、現実世界の全ての人物は、原初状態における自己像を共有してはならない。サンデルのロールズの自己論に対する解釈と批判は妥当であると判断せざるを得ない。

このようにして、ロールズは「原初状態における独立した自己」を想定しているとして、自由主義の立場をとっているとされ、サンデルは「コミュニティ内で拘束された自己」を想定しているとして、共同体主義の立場をとっていると一般的に理解されてきた。

ここで誤解のないように、サンデルのコミュニタリアンとしての立場を一層明確にしておく。

サンデルは自身がコミュニタリアンであるかどうかについては、以下の条件が前提であるという。

現代のリベラリズムはコミュニティについての説明が足りないというのが、私の論点の一つなのだから、その表現はある程度は当を得ている。しかし、コミュニティの価値観は多数派の意志を優先すべきであり、コミュニティの中で主流をなす価値観に正義が依存すべきだという考え方の別名がコミュニタリアニズムであるなら、私はそれを擁護しない。〔cf. サンデル 2011：372-373〕

つまり、サンデルはコミュニティを重要視している側面においてはコミュニタリアンであるが、その正義の観念がコミュニティの主流となっている善に依拠しなければならぬのであれば、コミュニタリアンではないという。コミュニティ内における伝統や多数派意見に依拠しないコミュニティを想定しなければ、コミュニタリアンの性格をもつサンデルの主張は理解できない。サンデルは、ロールズの自己論に対して、アイデンティティにおけるコミュニティからの少なからずの拘束性について主張している。この点をおさえることによって、コミュニタリアン：サンデルの思想はよりクリアに浮き彫りにされる。

以上の論争が、ロールズとサンデルにおける「リベラル・コミュニタリアン論争」と一般的に呼ばれている。日本におけるサンデル政治哲学研究の第一人者である菊池(2003)や小林(2010)も同様の論争解釈を行っていることから、一般的な理解と断じて間違いない。しかし、本当にこのような理解のままりベラル・コミュニタリアン論争と称してよいものか、甚だ疑問は残る。

Ⅱ 両論者の再検討

ロールズを「自由」を信奉する自由主義論者として、サンデルを「共同体」を信奉する共同体主義者として、この論争を把握することは本当に正しい解釈なのだろうか。本章では、両者の自己論をさらに明確にすることで、この論争の対立軸を別の場所に再設置したい。

Ⅱ-1 ロールズ自己論の再検討

ロールズの自己論は先に見た通りであるが、本節ではさらに詳しく見ていくことによって、ロールズの立場を「リベラリズム」とすることが妥当なのかを検討していく。

ロールズの想定する自己が、原初状態において「無知のヴェール」に包まれることによって、自己のあらゆる情報が秘匿されていることは、上記で確認したとおりである。その状態から、無知のヴェールに包まれた“自己”が「正義の原理(公正としての正義)」を選択することこそが、ロールズが導き出した正義の原理で

ある。しかし、ロールズの想定する自己はそればかりにとどまらない。ロールズの想定する原初状態における自己が「公正としての正義」を選択するまでの過程に、ロールズの自己論を正しく理解するためのヒントが隠されている。

原初状態のねらいは、広く共有されながらも弱い条件を具体化するところにあった。そうだとするならば、理論の基底におく想定はほとんどないくらいに減らすよう、可能な限り努めた方がよい。〔cf. Rawls 1971：126-129〕

ロールズのこの記述から読み取れることは、やはり原初状態における自己を無知のヴェールで包み、最低限度の条件の自己像を想定している、ということである。

各人が自分の努力だけで暮らそうとした場合に比べて、社会的協働はよい暮らしを提供してくれる。しかし自分たちの協調行動が生み出した多大なる便益がどのように分配されるかに関して、人々は無頓着ではありえないので、利害の衝突が存在する。各人の目的を達成しようとするために、少ないよりは多い取り分の方を全員が選好するからである。それゆえ、相対的利益の分割を決定する多種多様な社会的制度編成の中から選択し、適正な分配上の取り分についての合意を裏書きするための諸原理が必要である。〔cf. Rawls 1971：126-129〕

ロールズは以上の条件を「正義の情況」という。この正義の情況は、正義を必要としている情況をさすのであり、このような情況であるからして、正義の原理が必要であるのだ、とロールズは主張する。そしてこの情況を原初状態の人間は知っている、という。

以上のことがらをまとめると、原初状態の人は社会的協働を好み、その便益の分配の上で利害の衝突が生じるので、適正な分配基準としての原理が必要である、ということになる。一体このような想定はどこが「弱い条件」であり「理論の基底の想定を減らす」といえるのか甚だ疑問である。「社会的協働を好む」、「多い取り分を選好する」、「利害調整の原理を策定する」“自己”ということが前提として想定されていることが、無知のヴェールに包まれた自己の「弱い条件」とするには、無理がある。もちろん、敷いた条件が「強い」か「弱い」かは主観的なものに依存するであろう。しかし、この自己像では想定できていない、いやむしろ、想定しようとしなかったことが多いように思われる。

ロールズの議論においては、原初状態における無知のヴェールをかけられた自己が、“合理的”に考察及び議論を行えば、「社会的協働を好み」「多い取り分を選好し」「利害調整の原理を策定する」としている。無知

のヴェールによって個人の情報が隠されているとするのであれば、残った最低限度の条件は、人間一般の原理に限りなく近くなくてはならない。個人の情報が隠されているにもかかわらず、これらの自己の性向が設定されていることは看過しがたい。「社会的協働を好まず」「少ない取り分で満足し」「利害調整を望まない」自己というものを想定していない。また、想定していない理由を説明できていない。

ロールズは、原初状態における無知のヴェールに包まれた自分の性向やステータスについて何も知らない「弱い条件」の自己は、ただ一つの「正義の原理」を選択することは疑いようのないものとして捉えている。しかし、実際にロールズの行っている論証はこの逆である。ロールズは、はじめから利害を調整しなくてはならない状況を想定した。そして利害がうまく調整できるような自己像を後から設定したのである。その自己像こそが原初状態における弱い条件の自己、ということになる。正義の原理とは何かをはじめから想定した上で、それを選ぶであろう自己を都合のいいように決定し、さも合理的な自己はそれを選択することが必然であるかのように仕向ける。ロールズの想定した「自己」は弱い条件で想定されたものではなく、きわめて強い条件で想定されたものである。ロールズは、原初状態においては、自己の情報がほとんど秘匿された自己を想定している。それでは自己が正義の原理を選択する基準を持たないので、“最低限”の自己を決定する条件を用意する。それをロールズは「弱い条件」としている。しかし、「協働性を好む」「多い取り分を望む」「利害調整の原理を選択する」などの自己の条件は、“最低限”と呼べるものかどうかは疑わしい。ロールズ自らの信望する正義の原理に都合の良い条件を持った人格を想定していると言わざるを得ない。その意味で、ロールズの想定した自己像は極めて「強い条件」を付与されているのである。

ロールズにおいては、独立した合理的な自己が正義の原理の中で、自分の人生を自由に計画することや自分の善を選ぶことが肝要であるように、書かれている。そしてこれがロールズの思想を「リベラリズム」と呼ぶ所以なのであろう。しかし、「強い条件」を有した自己が選択する人生計画や善などは、強い条件が課せられているために自由に計画できるとは言い難い。

以上のことにより、ロールズおよびその思想を「リベラリズム的」であるとするに疑問を提唱せざるを得ない。強い条件を持つ制約された自己を想定しているロールズ思想が、「自由」を至上とするリベラリズムのそれと同じとは言い難い。

Ⅱ-2 サンデル「自己論」の再検討

ロールズの「自己論」を再検討した前節に対応して、この節ではサンデルの「自己論」を検討することにする。

る。

サンデルは、自身の自己論を主張してはいないが、ロールズの自己論を批判している。その批判を詳細に整理することによって、サンデル自身の想定している自己を浮き彫りにすることができるだろう。

サンデルのロールズ批判による自己論は従来、どのように解釈されているのか。以下は小林(2011)によるサンデル解釈である。

自己論について、ロールズの議論は、サンデルからすれば「負荷なき自己」、すなわち現実の具体的な人間のさまざまな特徴を一切知らないと仮定しているわけだから、抽象的で、実際にはない虚構である。現実の人間はさまざまな負荷、文脈、状況がある自己なのだから、ロールズの議論は現実性をもたない。このようにロールズの自己論の魔術を解いている。
〔cf.小林 2011: 149〕

ロールズの独立した自己概念に対して、そのような自己概念はなく、自己というものは、あらゆる環境などに縛られていて、「負荷」を負っているという解釈がなされている。しかしサンデル自身の自己概念を別の角度から見ると、従来のサンデル解釈とは異なった様相が浮かび上がる。

自分自身を独立したものとして考えることは、自らの家族・コミュニティ・国家・国民の成員として、自らの歴史の担い手として、過去の革命の子孫として、現在の共和国の市民として、自分自身を理解することから分離できないという事実から独立していることである。多かれ少なかれ、持続する愛着や関わり合いが一つになって、私の自己を部分的に定義しているからである。〔cf. Sandel 1982: 179〕

上記はⅠ-2でも確認したサンデルの自己概念にかかわる主張である。サンデルは、ロールズの想定する独立した自己概念では、自己が家族・コミュニティ・国家・国民の成員としての「負荷」が存在していることを説明できないと主張している。このあたりの主張は小林と比較しても相違はなく、一般的な解釈としては的を射ている。またこのような、共同体からの負荷を負っているという主張が、サンデルをコミュニタリアン＝共同体主義者としている。しかし、先述のとおり、サンデルは共同体における多数派の意志や伝統的意志に個人が依拠すべき、という場合におけるコミュニタリアン理解ならば、自身をコミュニタリアンとしていないことには再度留意しておかなければならない。

サンデルの自己概念を以上のように切り取ると、その思想はコミュニタリアニズムであると断定するのに

迷いは生じないが、異なった視点からの切り取り方によっては、ロールズの自己概念よりも、「負荷」を負っていないことになる。以下ではより詳細にサンデルの主張を整理する。

ロールズの自我は所有の主体であるのみならず、先行して固体化された主体でもあり、自らの利益に一定の距離をつねにとっている主体でもあることを思い出す必要がある。これがあるがゆえに、自我が経験を超えて、自我のアイデンティティをはっきりと固定できる。何をどれだけ経験しようとも、私のアイデンティティの臨界が乱されることはない。しかしこのように徹底的に独立した主体は、構成的な意味での所有と結びついた、いかなる善(悪)の構想も排除する。また自らの価値や情感をこえて、自らのアイデンティティ自体を請け負うことを可能にする愛着の可能性も排除する。よくも悪くも参加者のアイデンティティを危うくするような公的生活の可能性も排除する。自己理解が拡大していくように奮起される可能性も排除する。〔cf. Sandel 1982: 59-65〕

サンデルの主張では、ロールズの自己概念は自我のアイデンティティが決まりきっていることであらゆる可能性が排除されている、ということが読み取れる。その可能性とは、「善の構想」「(共同体への)愛着」「自己理解を拡大していくこと」が主に挙げられている。この中では、「自己理解を拡大していくこと」が重要になっていく。サンデルにとっては、「自己」というものは、その理解が拡大される可能性を了承することであり、その理解は「自己」に委ねられている。このあたりが、ロールズの自己概念とは大きく異なっている。ロールズの自己概念は、多元化する社会を止揚するために、それが可能な“合理的”な選択ができる自己像を設定している。この原初状態における“合理的”とされる自己像は先ほども確認したとおり、ロールズが固定化させた自己像である。一方で、サンデルはその自己理解の拡大の可能性を主張する。このことについて、サンデルは詳しく記述している。

熟議しているときには、私は、本当は何を欲しているかだけでなく、本当は誰なのかを問い、後者の問い、欲求だけが注目されることを超えて、アイデンティティ自体を反省するようになる。アイデンティティはいくつかの方向に開かれ、修正に応じるようになるものの、現在、まったくまとまった形がないわけではない。私のアイデンティティはうつり変わるものである。〔cf. Sandel 1982: 179-183〕

ここでサンデルが言いたいことは、3つある。

1つ目は、熟議を交わしているときには、私の性向を確認していると同時に、自分が何者であるのか、つまりアイデンティティの確認作業を行っているという。これに対して、ロールズの思想はこの過程においては段階を踏む。ロールズは原初状態における「自己」を先に設定しておいて、後に無知のヴェールを剥がし、自らの性向を確認した上で、熟議がおこなわれる。多元的な利害が調整されるように、である。この点が両者の立場で相違している。サンデルは、先にアイデンティティを設定し“終える”ことに反対している。サンデルは、アイデンティティの途中段階における拡大の可能性を潰さない。

先の記述のサンデルの主張の2つ目は、「自己がまったくまとまった形がないわけではない」というものである。サンデルは環境に左右される、言い換えるならば、負荷を負わされている自己像を強く意識する。そのために、サンデルの想定する自己像は、足元の揺らぐ、アイデンティティの確立などが無い状況が想定されている、と一般的に批判されることがある。しかしサンデルはこれを否定している。環境から負荷を負わされていることは、自分の存在を共同体などの環境に完璧に依存させているわけではないことをサンデルは強く主張する。サンデルの自己像は、あくまで環境に依存しているのではなく、環境からの負荷を負いながら、議論を交わすことにより、その認識を変えていくことにある。そして、それこそがサンデルの主張の3つ目とつながる。

先の記述のサンデルの主張の3つ目は、「アイデンティティは、いくつかの方向に開かれ、修正され、変化することである。サンデルはアイデンティティの固定化に強く反発する。家族・コミュニティ・国家などのいくつかの“環境”に身を置いている自己は、熟議を交わし、自らの性向や能力を示すと同時に、自らの性向や能力について自覚する。その発信源を探せば、自分を取り巻いている“環境”に自覚的になる。そうして自らのアイデンティティが拡大されていく。ここでは、「アイデンティティ自体が拡大していく」わけではないことに留意しなくてはならない。アイデンティティの拡大は、ロールズの想定する自己像でも行われるものである。あくまでここでは、自己の初期状態についての自己像の想定でなければ、同じ土俵での考察にならない。サンデルが拡大していくと主張しているのは、アイデンティティの“認識”である。熟議を通して、あるいはあらゆるきっかけにより、自らに負荷をかけている“環境”により自覚的になる、言い換えるならば、自己認識が拡大していくのである(いい意味でも悪い意味でも)。

さらに認識を拡大していく主体にも注目しなければならない。その認識を拡大させる主体は、「各人」なのである。ロールズの議論では、初期状態における自己

像は、無知のヴェールをかけられ、「弱い条件」を負った自己を想定しているが、実際には固定化された「強い条件」を負っている「自己」を無自覚に想定してしまっていることは前節のとおりである。このときの「強い条件」を課されている自己を設定したのは各人ではなく、ロールズその人である。自己概念は、ロールズにおいては極めて恣意的に設定されており、サンデルの自己像は、各人の認識の変化によって如何様でも変更可能なのである。

結論

両者の自己論を再検討したところで、両者がどのように理解されていたかをもう一度確認する。

ロールズは、原初状態における自己を想定する。原初状態における自己は、無知のヴェールをかけられることにより、自分の能力や性向や地位などの情報を一切遮断されている。その意味で、ここで想定されている自己は、極めて少ない条件を有している。さらにその自己達は“合理的”な思考を持ち合わせていることが想定されている。無知のヴェールをかけられている人間が合理的に思考をめぐらせれば、自ずと全ての人は一つの原理を採択するという。それが「正義の原理」であり、その原理が「公正としての原理」である。つまり、自分にとってすべての情報が開示されていないことが、自らが不利になるおそれのあるものを選択しないことへの根拠になる。そしてその選択は、格差を生まない選択につながる。自らの利を安全に得ることができるように、他者の利に関しては寛容になる。そうして、格差を是正する原理＝「公正としての原理」が採択されることはすでに I で確認したとおりである。そうして正義の原理を採択した以後の世界で、無知のヴェールが払われ、以後の世界で自らの性向と能力や地位などを知る。格差が取り払われた世界で、自らの性向に合った人生計画を“自由”に行うことができる。それこそが、ロールズが自由主義者と認識されている所以である。

しかし、実のところは少し異なっている。ロールズの想定している自己像は、「弱い条件」などではない。ロールズの想定している自己は、極めて「強い条件」が付与されている。先ほど整理したように、ロールズは正義の状況を多元的主張が止揚される状況だと認識している。そのような状況を可能にするために想定されたのが、さきほどの「弱い条件」を持った自己としばしば理解されているものであるが、その実は、極めて「強い条件」を課せられた自己である。そしてロールズは、そのような自己以外は、無知のヴェール下における“合理的”な人間ではないとして正義の原理を決定する議論の場から切り捨てる。極めてロールズ主観で設定された自己であると言わざるを得ない。

これに対してサンデルは、共同体からの負荷のある

自己を想定する。そして、独立した自己を想定するロールズの自己概念を「負荷なき自己」と糾弾し、自らの「負荷ありし自己」を主張する。本来の自己、というものは、家族・コミュニティ・国家・国民・歴史などからの制約を受けている。そのような“環境”が自己の形成に深くかかわっており、まったくの独立した自己というものを批判する。その意味で、共同体からの何かしらの負荷を強調するサンデルは、コミュニタリアン(共同体主義者)と呼ばれる。さらにサンデルは自身がコミュニタリアンとラベリングされることについて条件をつけていることは確認した。サンデルは、共同体の中の伝統と多数的価値観に自己を依拠させなければならない、という主張がコミュニタリアンの主張と定義される場合において、コミュニタリアンを名乗らない。

サンデルのこの主張のコミュニタリアンの理解にも疑問符が残る。確かに、サンデルの自己概念は共同体などの環境にある程度は縛られるという意味では負荷が存在している。しかし、サンデルの自己概念に関してのロールズとの相違点はそれだけに留まらない。サンデルの自己概念は、各人が自己認識を拡大する可能性を残しているとしている点で、ロールズとは異なっている。ロールズの設定した自己概念では、固定化された初期状態における自己概念は変更されることはない。しかし、サンデルの想定する自己概念においては、初期状態と呼べるようなものではなく、もしくは永久的に継続され、熟議などで自らを省みるたびに、自己認識が変革していくのである。さらに、サンデルは自身を共同体からの強制を受ける場合におけるのコミュニタリアン思想を受け付けない。共同体からの伝統や善の価値観を強制されないという点においてもサンデルの主張はリベラリズムの性質を有しているといえる。加えて、ロールズの固定化している自己像では、その自己像を決定している主体は、ロールズ(自身は、それを認めないだろうが)本人である。サンデルの主張では、自己像の認識を変更させる主体は各人に委ねられている。つまり、自己像の設定においてはロールズの議論よりもサンデルの議論の方が、より自由に決定することができる。ここに一種の倒錯が起きている。

リベラリズムの性質を帯びていたはずのロールズの自己概念は、ロールズ自身によって決定されていた固定化された自己概念であり、その意味ではこちらの方が「負荷」がかかっている。一方、コミュニタリアンと称されるサンデルの自己概念は、議論のはじめこそ共同体からの負荷がかかっているものの、その輪郭はどこまでも変容していき、その射程は各人が決定しているのである。「自由」を称賛するロールズ思想が束縛されており、「共同体」を意識するサンデルの思想はリベラルであるということは何とも皮肉なことである。

終わりに

本論文では、「リベラル・コミュニタリアン論争」と呼ばれる論争の構造を詳細に分析し、一般的解釈(おそらく本人たちも同様に解釈している)とは違う見方から、論争の構造を再配置した。

このことから、リベラル・コミュニタリアン論争はロールズ(リベラリズム)とサンデル(コミュニタリアニズム)の衝突であり、それが「自由」と「共同体からの束縛」を対立軸に設定していると決めつけるほど、ことはそう単純ではない。見方・考え方を換えれば、それぞれの立場と主張はかみ合わず、倒錯を引き起こしていることがわかる。リベラル・コミュニタリアン論争は、すでに終わっているとの判断がしばしばなされるが、それは勝手な独断と偏見による決めつけに他ならない。この論争はもっと根が深く、複雑怪奇な現象なのである。

実は、サンデルとロールズにおけるリベラル・コミュニタリアン論争には、第2ラウンドがある。第1ラウンドは、本論文で紹介した自己概念についてである。そして第2ラウンドは、政治的分野における主張の対立である。しかし、この第2ラウンドは第1ラウンドの自己概念のそれぞれの主張を前提にしている。自己

概念に関する両者の倒錯が明らかになった今、政治的分野もまた見方を変えなければならない。この分野を解き明かすことが、今後の課題となるだろう。

【註】

- 1) 「公正としての正義」とは簡潔に紹介するならば、格差を容認しないという正義なのではあるが、本論文は深く取り上げない。本論文で重要なのは、この原理を選択したと思われる原初状態の「自己」の状態であり、「公正としての正義」の妥当性を検討するものではない。あくまで、この原理を採択したと思われるロールズの自己像が問題の所在なのである。

【参考文献】

- 菊池理夫、2003、「実践哲学としてのコミュニタリアニズム：マッキンタイア、テイラー、ウォルツァー、サンデルの政治思想から」、『法學研究』(76)、慶応義塾大学法学研究会
- 小林正弥、2010、『サンデルの政治哲学〈正義〉とは何か』、平凡社
- Rawls, John, 1971, "A *THEORY OF JUSTICE*", Harvard University Press
- Sandel, Michael J, 1982, "*Liberalism and the Limits of Justice*", Cambridge University Press
- サンデル, マイケル, 2011, 『公共哲学』, 鬼澤忍訳, 筑摩書房